

大ヴァシリイの聖體禮儀 (輔祭なし)

【 重聯禱 】

司祭) われらみなたましい まつと い われら おもい まつと い
我等皆 靈 を全うして曰わん、我等の思 を全うして曰わん、



司祭) しゅぜんのうしゃ わ れつそ かも なんぢ いの き い あわれ
主全能者、吾が列祖の神よ、爾に禱る聆き納れて憐めよ、



司祭) かも なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ
神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、



司祭) またわ くに てんのうおよ くに つかさど もの ため いの
又我が國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、



司祭) またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう およ お
又教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、及びハリストスに於

ける ことごと われら けいてい ため いの
ける 悉くの我等の兄弟の爲に禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またわれら ^{けいてい}、^{しよしさい} 諸司祭、^{しよしゅうどうしさい} 諸修道司祭、^{およ} 及び^おハリストスに於ける^{われら}我等の^{しゅうけいてい}衆兄弟
の爲に禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またつね ^{きおく}に記憶せらるる、^{ふく} 福たる^{しせい}至聖なる^{せいぎょう}正教の^{パトリアルフ}総主教、この^{せいどう}聖堂の^{こんりゅうしゃ}建立者、^{およ} 及び^{すで}已に寝りし^{ねむ} 悉^{ことごと}くの^{ふそけいてい}父祖兄弟、此の^{こと}處と^{しよほう}諸方とに^{ほうむ}葬られたる^{せいぎょう}正教の^{もの}者の爲
に禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) また此の^{しそん}至尊なる^{せいどう}聖堂に^{もの}物を^{たてまつ} 獻り、^{ぜんぎょう}善業を^{おこな} 行い、^{これ}之に^{ろう} 勞し、^{これ}之に^{うた} 歌い、^{およ} 及び
此に^こ 立ちて^た 爾の^{なんぢ} 大にして^{おおい} 豊なる^{ゆたか} 憐を^{あわれみ} 仰ぎ望む^{あお} 者の爲に禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

(※ 特別な災害や特別な感謝がある時、重聯禱にその旨追加する場合がある。その場合も「主憐れめ、主憐れめ、主憐れめよ。」と応えて歌う。)

司祭) (黙誦：主我が神よ、爾の諸僕より此の熱切の祈禱を受け、爾が憐の多きに
 よ われら あわれ なんぢ めぐみ われら およ なんぢ ゆたか あわれみ あお なんぢ たみ
 因りて我等を憐み、爾の恵を我等と凡そ爾の豊なる憐を仰ぐ爾の民
 つかわ たま
 に遣し給え、)

司祭) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今
 いっ よよ
 も何時も世に、



【 啓蒙者の爲の聯禱 】

司祭) 啓蒙者よ、主に禱るべし、



司祭) 信者よ、啓蒙者の爲に禱らん、願くは主は彼等に憐を垂れん、



司祭) 眞實の言を以て彼等を啓蒙せん、

しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

司祭) ^{ぎ ふくいんけい かれら ひら}
義の福音經を彼等に啓かん、

しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

司祭) ^{かれら そのせい こう しと きょうかい いてつ}
彼等を其聖・公・使徒の教會に一にせん、

しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ かれら すく あわれ たす まも}
神よ、爾の恩寵を以て、彼等を救い憐み佑け護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

司祭) ^{けいもうしゃ なんぢら こうべ しゅ かが}
啓蒙者よ、爾等の首を主に屈めよ、

しゅ な ん ぢ に 。
主 爾

司祭) (黙誦：主我が神、天に居り、爾が悉くの造工を顧る者よ、爾の僕・啓蒙
 者・其首を爾の前に屈めし者を顧み、彼等に軽き荷を予え、彼等を
 爾が正教會の尊き肢體となし、彼等に復生の浴盤、諸罪の赦、不
 朽の衣を賜いて、爾我等の眞の神を識るを致させ給え、)

司祭) 願くは彼等も我等と偕に、爾父と子と聖神の至尊至榮の名を讃揚せん、今も何時
 も世に、



【 信者の聯禱1 】

司祭) 衆啓蒙者出でよ、啓蒙者出でよ、衆啓蒙者出でよ、啓蒙者一人もなく、唯信
 者復又安和にして主に禱らん、



司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) 睿智、

司祭) (黙誦：主よ、爾は我等に此の大なる救の機密を示し、爾は我等卑微にして堪

えざる 爾の僕に、爾の聖なる祭壇の奉事者となるを許し給えり、求む 爾が
 聖神の力を以て、我等を此の奉事に堪うる者となして、我等が定罪なく 爾の聖
 なる光榮の前に立ちて、爾に讚美の祭を獻ぐるを致させ給え。蓋 爾は衆
 中に萬事を行う者なり、主よ、我等の罪と衆人の過との爲に捧ぐる所
 の我等の祭が 爾の前に納れられ喜ばるる者となるを得せしめ給え、)

司祭) けだしおよ 蓋 凡そ光榮尊貴伏拜は 爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



【 信者の聯禱2 】

司祭) われらまたまたあんわ 我等復又安和にして主に禱らん、



司祭) かみ 爾の恩寵を以て、我等を助け救い 憐み護れよ、



司祭) えいち 睿智、

司祭) (黙誦：かみ じれんこうおん もつ われら ひび かえり われらひび つみ なんぢ た ざる僕を 爾が聖なる光榮の前に立てて 爾の聖なる祭壇に奉事せしむる主よ、

ぼく なんぢ せい こうえい まえ た なんぢ せい さいだん ほうじ しゅ

なんぢ せいしん ちから もつ われら こ ほうじ ため かた われら くち ひら ことば たま
爾 が 聖 神 の 力 を 以 て 我 等 を 此 の 奉 事 の 爲 に 固 め、 我 等 の 口 を 啓 き 言 を 賜

いて、 獻 げ ん と す る 祭 品 に 爾 が 聖 神 の 恩 寵 を 呼 ば し め 給 え、)

司祭) われらつね なんぢ けんぺい もと まも こうえい なんぢちち こ せいしん けん ため
我 等 常 に 爾 が 權 柄 の 下 に 護 ら れ て、 光 榮 を 爾 父 と 子 と 聖 神 に 獻 ず る が 爲 な り、

いま いつ よよ
今 も 何 時 も 世 世 に、



【 ヘルヴィムの歌 】



こすのせいさんしゃにたてまつり

て

このよのつとめをしりぞくべし

しりぞくべし

司祭) (黙誦：肉體の慾と快樂とに縛られし者は、一も爾 光榮の王に來り、或は
 ちか あるい ほうじ た けだしなんぢ ほうじ てんぐん ため おおい
 近づき、或は奉事するに堪うるなし、蓋 爾に奉事するは、天軍の爲にも大に
 おそ しか なんぢ い がた はか がた なんぢ じんあい よ ほんせい
 して畏るべきなり、然れども爾は言い難く量り難き爾の仁愛に因りて、本性を
 か うしな ひと われら ため アルヒュレイ またばんゆう しゅさい よ
 易えず失わずして人となり、我等の爲に司祭首となり、又萬有の主宰なるに縁
 われら こ ほうじ むけつさい せいじ つた たま けだししゅわ かみ なんぢ ひとり
 りて、我等に此の奉事の無血祭の聖事を傳え給えり、蓋 主我が神や、爾は獨
 てんち こと さいり なんぢ ほうざ にな もの しゅ
 天地の事を宰理す、爾はヘルヴィムの寶座に荷わるる者、セラフィムの主、イブラ
 おう ひとりせい せいしゃ うち いこ もの ゆえ われなんぢひとりぜん よ い
 イリの王、獨聖にして聖者の中に息う者なり、故に我爾獨善にして善く納
 もの いの われつみ た なんぢ ぼく かえり わ たましい ころろ よこしま
 る者に禱る、我罪ありて堪えざる爾の僕を顧み、我が靈と心とを邪な

かりよ きよ われしんびん おんちやう こうむ もの なんぢ せいしん ちから よ こ
 る思慮より浄め、我神品の恩寵を被れる者を、爾が聖神の力に藉りて、此
 なんぢ せい しょくあん まえ た なんぢ しじやう せいたいしそん せいけつ きみつ
 の爾の聖なる食案の前に立ち、爾が至浄なる聖體至尊なる聖血の機密を
 おこな た もの たま けだしわれこうべ かが なんぢ つ なんぢ いの なんぢ
 行うに堪うる者となし給え、蓋我首を屈めて爾に就き、爾に禱る、爾の
 かんばせ われ さ なか われ なんぢ ぼくしやう うち しりぞ なか すなわちわれつみ
 顔を我より避くる勿れ、我を爾が僕衆の中より却くる勿れ、乃我罪
 あ あた なんぢ ぼく こ さいもつ ささ いた たま けだし わ かみ
 有りて當らざる爾の僕に此の祭物を獻ぐるを致させ給え、蓋ハリストス我が神
 なんぢ けん もの けん もの う もの わか もの われらこうえい なんぢ
 よ、爾は獻ずる者と獻ぜらるる者、受くる者と頒たるる者なり、我等光榮を爾と
 なんぢ むげん ちち しせいしぜん いのち ほどこ なんぢ しん けん いま いつ
 爾の無原の父と 至聖至善にして生命を施す爾の神とに獻ず、今も何時も
 よよ
 世世に、)

司祭) (黙誦：われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた
 我等奥密にしてヘルヴィムを儼り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い
 いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ べ てんし ぐん み にな たてまつ ぼん
 て、今此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬
 ゆう おう いただ よ
 有の王を戴かんとするに縁る、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、
 われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた
 我等奥密にしてヘルヴィムを儼り、聖三の歌を生命を施す三者に歌いて、
 いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ べ てんし ぐん み にな たてまつ ぼんゆう
 今此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬有
 おう いただ よ いただ よ
 の王を戴かんとするに縁るを戴かんとするに縁る、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril
 イヤ、
 われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた
 我等奥密にしてヘルヴィムを儼り、聖三の歌を生命を施す三者に歌いて、
 いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ べ てんし ぐん み にな たてまつ ぼんゆう
 今此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬有
 おう いただ よ いただ よ
 の王を戴かんとするに縁るを戴かんとするに縁る、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril
 イヤ、
 かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ
 神よ、我罪人を浄め給え、神よ、我罪人を浄め給え、神よ、我罪人を浄め
 たま
 給え、)

【 大聖入 】

司祭) ねがわ しゅ かみ そのくに おい わ くに てんのうおよ くに つかさど もの つね きおく
 願くは主・神は其國に於て、我が國の天皇及び國を司る者を恒に記憶せん、
 いま いつ よよ
 今も何時も世世に、

ねがわ しゆ かも そのくに おい きょうかい つかさど そんな われら ぜんにほん ふしゆきょう
願くは主・神は其國に於て、教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教

つね きおく いま いつ よよ
セラフィムを恒に記憶せん、今も何時も世に、

ねがわ しゆ かも そのくに おい すで ねむ ふしゆきょう ふしゆきょう ふ
願くは主・神は其國に於て、已に寢りし府主教セルギイ、府主教イリネイ、府

しゆきょう ふしゆきょう ふしゆきょう だいしゆきょう しゆ
主教ウラディミル、府主教フェオドシイ、府主教ダニイル、大主教ニコライ、主

きょう しゆきょう およ こと きおく われら すで ねむ かぞく
教ニコライ、主教ペトル、(及び殊に記憶せらるる某)我等の已に寢りし家族、

けいていしまい もろもろ えんしゃ ほうゆうら つね きおく いま いつ よよ
兄弟姉妹、諸の縁者、朋友等を恒に記憶せん、今も何時も世に、

ねがわ しゆ かも そのくに おい なんぢしゅうせいきょう ら およ こと き
願くは主・神は其國に於て、爾衆正教のハリストティアニン等(及び殊に記

おく
憶せらるる某)を恒に記憶せん、今も何時も世に、





司祭) (黙誦： 尊とうときイオシフは 爾なんぢの 潔いさぎよき身を木より下し、 淨きよき布ぬのに裹つつみ、 香こうりょう料りょうにて
 おお あらた はか おさ
 覆おほい、 新あらたなる墓はかに藏おさめり、

ハリストスよ、 爾なんぢは神かみなるにより、 體からだにて墓はかに在あり、 靈たましいにて地ち獄ごくに在あり、 右うとう盜とう
 とも てんどう あ ちち せいしん とも ほうざ あ かぎり もの いっさい み たま
 と偕ともに天てん堂どうに在あり、 父ちちと聖せい神しんと共ともに寶ほう座ざに在あり、 限かぎりなき者ものとして一切いっさいを満みて給たま
 えり、

ハリストスよ、 我わが復ふく活かつの 泉いづみたる 爾なんぢの 墓はかは、 生いのち命ほどこを 施ものす者ちどう、 地うらわ堂わより 美うらわし
 もの じつ いか おう みや かがや もの あらわ
 き者もの、 実じつに如何いかなる王おうの 宮みやよりも 耀かがやける者ものと 顯あらわれたり、

尊とうときイオシフは 爾なんぢの 潔いさぎよき身を木より下し、 淨きよき布ぬのに裹つつみ、 香こうりょう料りょうにて覆おほい、
 あらた はか おさ
 新あらたなる墓はかに藏おさめり、

主しゅよ、 爾なんぢの 恵めぐみに因よりて 恩おんをシオンたに垂たれ、 イエルサリムじょうえんの 城た垣たまを建そて給ええ、 其
 とき なんぢぎ まつり ささげもの やきまつり よるこ う そのとき ひとびとなんぢ さいだん
 時ときに 爾なんぢ義ぎの 祭まつり、 獻ささ物げものと燔や祭まつりを 喜よろこび饗うけん、 其その時ときに 人ひと人びと 爾なんぢの 祭さい壇だんに
 こうし そな
 犠こうし牲そなを奠えんとすえんとす、)

【 増聯禱 】

司祭) 我われ等ら主しゅの 前まえに吾わが 禱いのりを 増まし加くわえん、



司祭) ささ とうと さいひん ため しゅ いの
 獻ささげたる 尊とうとき祭さい品ひんの 爲ために主しゅに 禱いのらん、

しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

司祭) ^{こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ こころ もつ こき た もの ため しゅ いの}
此の聖堂、及び信と 慎 と神を畏るる 心 とを以て此に来る者の爲に主に禱ら
ん、

しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

司祭) ^{われら もろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの}
我等 諸 の憂愁と忿怒と危難とを 免 るるが爲に主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも}
神よ、爾の恩 寵 を以て、我等を 佑け 救い 憐 み 護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

司祭) ^{こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと}
此の日の 純 全 ・ 成 聖 ・ 平 安 ・ 無 罪 ならんことを主に 求む、

しゅ 主 た 賜 ま え よ 。

司祭) ^{へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと}
 平安の天使、正しき 教師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、

しゅ 主 た 賜 ま え よ 。（

司祭) ^{われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと}
 我等の罪と 過 とを宥め赦さんことを主に求む、

しゅ 主 た 賜 ま え よ 。（

司祭) ^{われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと}
 我等の 靈 に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、

しゅ 主 た 賜 ま え よ 。（

司祭) ^{われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと}
 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、

しゅ 主 た 賜 ま え よ 。（

司祭) われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん るこ およ
我等の生命の終がハリストティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及び

ハリストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤ

と、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉く

の我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) (黙誦: しゅわ かみ われら つく こ いのち い われら すくい みち しめ われら てん
主我が神、我等を造りて此の生命に入れ、我等に救の道を示し、我等に天

上の奥密の啓示を賜いし者よ、爾は爾が聖神の力を以て、我等を此の奉

事の爲に立て給えり、求む主よ、我等が爾の新約の奉事者 爾の聖機密の役

者となるを嘉し、爾が慈憐の多きに因りて、我等爾の聖なる祭壇に近づく者を

い たま ねがわ われら わ つみ しゅうじん あやまち ため なんぢ これいち
納れ給え、願くは我等は、我が罪と衆人の過との爲に、爾に此の靈智なる

無血の祭を獻ぐるに堪うる者とならん、祈る爾之を爾の聖なる天上の無形

の祭壇に置き、馨香として之を享け、我等に報ゆるに爾が聖神の恩寵を降す

を以てせよ、神よ、我等に臨み、此の我等の奉事を顧みて、之を享くこと、アヴ

エリの獻物ノイの祭、アブラアムの燔祭、モイセイとアアロンとの神職、サムイ

ルの和平祭を享けしが如くせよ、主よ、爾曾て聖使徒より此の眞の奉事を享け

しが如く、我等罪なる者の手よりも、爾の仁慈を以て此の獻物を享け給え、此

くのごと われら きず なんぢ せい さいだん ほうじ われら なんぢ ぎ
くの如く、我等を玷なく 爾の聖なる祭壇に奉事せしめて、我等に 爾の義なる

むくい おそ ひ おい ちゆう ち いえつかさ むくい え いた たま
報の畏るべき日に於て、忠にして智なる家 宰の賞を得るを致させ給え、)

司祭) なんぢ どくせいし じれん よ なんぢ かれ しせいしぜん いのち ほどこ なんぢ しん
爾の獨生子の慈憐に因りてなり、 爾は彼と至聖至善にして生命を施す 爾の神

とも あが ほ いま いつ よよ
と偕に崇め讃めらる、今も何時も世世に、



【 ニケア・コンスタンチヌーポリ全地公会にて採択されし信経 】

司祭) しゅうじん へいあん
衆人に平安、



司祭) われらたがい あいあい どうしん う みと ため
我等互に相愛すべし、同心にして承け認めんが爲なり、



司祭) (黙誦: しゅわれ ちから われなんぢ あい しゅ われ かため われ かくれが しゅわれ
主我の力よ、我爾を愛せん、主は我の防固、我の避所なり、主我の

ちから われなんぢ あい しゅ われ かため われ かくれが しゅわれ ちから われ
力よ、我爾を愛せん、主は我の防固、私の避所なり、主我の力よ、我

なんぢ あい しゅ われ かため われ かくれが
爾を愛せん、主は我の防固、私の避所なり、

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常聖の者よ、我等を憐めよ、)

司祭) もん もん つつし き
門、門、敬みて聴くべし、



われしんず、ひとつのかみちちぜんのうしゃ、てん
我信一神父全能者天

とち、みゆるとみえざるばんぶつをつくりし
地見見萬物造

しゅを、またしんず、ひとつのしゅイイスハリスト
主又信一主

かみのどくせいの子、よろづよのさきに
神の獨生の子、萬世のさきに

ちちよりうまれ、ひかりよりのひかり、まこと
父生光の光、まこと

のかみよりのまことのかみ、うまれし
神の真の神、うまれし

ものにてつくられしにあらざらず、ちちといっ
者造非父一

たいにしてばんぶつかれにつくられ、われ
體萬物彼造我

らひとびとのため、またわれらのすくいのため
等人人の為又我等の救いの為

めにてんよりくだり、せいしんおよびどうて
天降聖神及童貞

いぢよマリヤよりみをととりひととなり、わ
 女 身 取 人 我
 れらのためにポンテイピラトのときじゅうじかに
 等 爲 時 十 字
 くぎうたれ、くるしみをうけほうむら
 釘 苦 受 葬
 れ、だいさんじつにせいしょにかないてふく
 第 三 日 聖 書 應 復
 かつし、てんにのぼり、ちちのみぎにざ
 活 天 升 父 右 坐
 しこうえいをあらわしていけるものとしせ
 光 榮 を 顯 生 者 の 死
 しものとしんぱんするたためにまたきたり、
 者 審 判 爲 還 來
 そのくにおわりなからんを、またしんず、せい
 其 國 終 又 信 聖
 いしんしゅいのちをほどこすものちちよりい
 神 主 生 命 施 者 父 出
 で、ちちおよびことともにおがまれほめら
 父 及 子 共 拜 讚
 れ、よげんしゃをもつてかつていいしを、また
 預 言 者 を 以 嘗 言 し を 又
 しんず、ひとつのせいなるおおやけなるしとの
 信 一 聖 公 使 徒

きょう か い を 、 わ れ み と む 、 ひ と つ の せん れ
 教 會 我 認 一 洗 禮
 い 、 も っ て つ み の ゆ る し を う る を 、 わ れ の 望
 以 罪 赦 得 我 望
 ぞ む し しゃ の ふ く か つ 、 な ら び に ら い せ い
 死 者 復 活 並 來 世
 の い の ち を 、 ア ミ ン 。
 生 命

【 アナフォラ 奉 獻 】

司祭) ^{ただ}正しく立ち、^た畏れて立ち、^{おそ}敬みて^た安和にして^{つつし}聖なる^{あんわ}獻物を^{せい}奉らん、^{ささげもの}^{たてまつ}

へ い わ の あ わ れ み さ 讃 ん よ 揚 う の ま つ
 平 和 の あ 憐 れ み さ 讃 ん よ 揚 う の ま 祭

り を

司祭) ^{ねがわ}願くは我が^わ主^{しゅ}イイススハリストスの^{めぐみ}恩、^{かみちち}神父の^{いつくしみ}慈、^{せいしん}聖神の^{したしみ}親は、^{なんぢしゅう}爾衆

^{じん}人と^{とも}偕に^あ在らんことを、

な ん ぢ の し ん と も
 爾 衆 の 神 と 偕 も

司祭) ^{こころうえ むか} 心 上に向うべし、

しゅ に む か え り
主 に 向 か え り

司祭) ^{しゅ かんしゃ} 主に感謝すべし、

ち ち と こ 子 と せ い し ん ち ち と
父 ち と 子 と 聖 い 神 ち ち と

こ 子 と せ い し ん い っ た い に し
子 子 聖 い 神 ん い った い に し

て わ 分 か れ ざ る せ い さ ん しゃ は
わ 分 か れ ざ る 聖 い さ ん しゃ は

と う と み お が ま る べ し と う と み お 拜
と う と み お が ま る べ し と う と み お 拜



司祭) (黙誦: 永在の主 宰・主・神・父・全能者・拜まるる者よ、爾を讚美し、爾

を歌頌し、爾を讚揚し、爾に伏拜し、爾に感謝し、爾獨實在す

る神を讚榮し、悔悟の心と謙卑の靈とを以て、爾に此の靈智の奉事を

獻ぐるは、誠に當然に誠に義にして、誠に爾が聖位の威嚴に適えり、

蓋爾は我等に爾の眞實を知るを賜いし主なり、主宰よ、孰か能く爾の

能力を言い、爾が悉くの讚美を傳え、爾が諸時の諸奇蹟を宣ぶるに堪

えん、爾は萬有の主 宰、天と地、見ゆると見えざる萬物の主、光榮の寶座

に坐し、淵を鑿み、始なく、見る可からず、測る可からず、象る可からず、變

らざる者、我が主 イイススハリストス、大なる神及び救世主、我等の恃な

る者の父なり、彼は爾が至善の像、同形の印、己の中に爾父を顯

す者、生活の言、眞の神、永遠の智慧・生命・成聖・能力・眞の光

なり、彼に因りて聖神現れたり、乃眞實の神、義子とする恩賜、將來の

嗣業の聘質、永福の始、生活を施す力、成聖の泉なり、悉くの

有言有智の造物は、彼に固められて爾に奉事し、爾に永遠の讚榮を獻

ず、蓋萬有は爾に務む、天使・天使首・寶座・主制・首領・權柄・

能力・多目のヘルヴィムは爾を讚美し、セラフィムは爾を環りて立つ、各

六翼あり、二翼其面を蔽い、二翼其足を覆い、二翼を以て飛び、緘ぢざる

口、黙さざる讚榮を以て互に相呼ぶ、)

司祭) 凱歌を歌い、籲び、叫びて曰う、

せ 聖 い せ 聖 い せ 聖 い な る しゅ せ い な
主 聖 い な

る しゅ 主 サ ヴァ オ フ て ん ち に
主 天 地 に

な ん ち の こ 光 う え い は あ ま ね し い と た か き
爾 光 榮 遍 至 高 か き

に オ サ ン ナ い 至 と た か き に オ サ ン ナ
至 高 かに 至 高 かに

しゅ の な 名 に て き た る も 者 の は しゅ の
主 名 に 来 たる 者 の 主

な に て き た る も 者 の は あ 崇 が
名 に 来 たる 者 の 崇 敬

め あ 崇 が め ほ 讃 め ら る い と た 高
至 高

か き に オ サ ン ナ い 至 と た 高 か き に
至 高

オ サ ン ナ

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい われらつみ もの こ ふく ぐん とも よ い なんぢ} 人を愛する主 宰よ、我等罪ある者も此の福たる軍と偕に籲びて曰う、爾

^{せい かな まこと しせい かな なんぢ せい いげん はか がた なんぢ ことごと} は聖なる哉、誠に至聖なる哉、爾が聖位の威嚴は測り難し、爾は悉

^{しわざ せい ぎ まこと しんばん もつ ことごと われら ほどこ よ} くの行爲に聖なり、義と眞の審判とを以て 悉く我等に施ししに因る、

^{けだし かなんぢ ち ちりと ひと つく なんぢ ぞう もつ これ とうと} 蓋 神よ、爾は地より塵を取りて人を造り、爾の像を以て之を貴くし、

^{これ かんび ちどう お これ なんぢ いましめ まも ため し いのち えい} 之を甘美なる地堂に置き、之に爾の誠を守るが爲に、死せざる生命と永

^{ふく たのしみ やく たま しか かれ なんぢかれ つく まこと かん そむ} 福の 樂とを約し給えり、然れども彼は、爾彼を造りし眞の神に背き、

^{へび いざない まよ おのれ つみ ころ かん なんぢ ぎ しんばん} 蛇の誘に迷わされ、己の罪に殺されしにより、神よ、爾は義の審判を

^{もつ かれ ちどう こよ おい かれ つく ため と つち かん} 以て彼を地堂より此の世に逐い出だし、彼を造るが爲に取りたる土に歸し、

^{なんぢ もつ かん ため ふくせい すくい もう たま しぜんしゃ けだし} 爾のハリストスを以て、彼が爲に復生の救を設け給えり、至善者よ、蓋

^{なんぢ おわり いた なんぢ つく もの かん さ なんぢ て しわざ わす} 爾は終に至るまで、爾が造りし物より顔を避けず、爾が手の行爲を忘れ

^{すなわちなんぢ じんじ あわれみ よ たほう もつ これ かんえり よげんしゃ つかわ} ず、乃爾が仁慈の憐に因りて、多方を以て之を顧み、預言者を遣

^{なんぢ せいじん るいたいなんぢ よろこ もの もつ いのう おこな なんぢ ぼくしよ} し、爾の聖人、累代爾を喜ばしし者を以て異能を行い、爾の僕諸

よげんしゃ くち もつ われら つ 　 あらかじ しょうらい すくい し 　 ほうりつ たま
 預言者の口を以て我等に告げて、預め將來の救を知らしめ、法律を賜
 いて 助となし、諸天使を立てて守護者となし、時の満つるに及びて、我等に告
 ぐるに 爾の子を以てせり、爾は彼を以て二世を造れり、彼は爾が光榮の
 ひかり なんぢ せい い しょうぞう 　 かれ そのうりよく ことば ばんぶつ ふち
 光、爾が聖位の肖像なり、彼は其能力の言にて萬物を扶持して、
 おのれ なんぢかみ ちち ひと 　 せん しか えいざい かみ ち 　 あらわ
 己を爾神・父に匹しくするを僭とせず、然れども永在の神にして地に顯
 れ、人と偕に在し、聖なる童貞女より身を取り、己を虚くし、僕の形を
 う われら ひせん からだ に 　 もの たま われら そのこうえい かたち に
 受け、我等の卑賤の體に肖たる者となり給えり、我等を其光榮の形に肖た
 る者となさんが爲なり、蓋人に因りて罪は世に入り、罪に因りて死も亦入り
 しにより、爾の獨生子、爾神・父の懷に居る者は、婦即聖なる童
 貞女・永貞童女マリヤより生れ、法律の下に在りて、甘じて己の身に於
 て罪を擬定せり、アダムの中に死する者が爾のハリストスの中に復生せん爲
 なり、彼は此の世に居り、救を施す誠命を賜い、我等を偶像の惑より脱
 し、我等を導きて爾眞の神・父を知るに至らしめ、我等を、選を蒙る
 ぞく おう しんびん せい たみ 　 おのれ え みづ もつ われら きよ せいしん
 族、王たる神品、聖なる民として己に獲て、水を以て我等を淨め、聖神
 を以て聖にし、己を贖として、我等罪の下に賣られたる者を繋ぎし所
 の死に予え、己を以て萬有を充滿するが爲に、十字架に由りて地獄に降
 り、死の病を釋き、第三日に復活して、凡の肉體の爲に死より復活す
 る途を啓き、(蓋腐敗は生命の首を繋ぐ能わず)死者の中より首生する
 者として、死せし者の中に首實の果となれり、親ら萬有の中に萬事の首始
 たらんが爲なり、天に升起、爾が至大位の右に其高きに坐し、再び來り
 て、各人に、其行に依りて報い給わん、彼は我等に其救を施す苦
 の記憶を遺せり、即此の我等が彼の誠に因りて獻げし所の者なり、
 けだしおのれ せかい いのち ため わた よ 　 そのじゆう えいえん きおく いのち
 蓋己を世界の生命の爲に付しし夜、其自由にして永遠に記憶すべき生命
 を施すの死に出づるに臨みて、其聖にして至淨無玷なる手に餅を取り、爾

かみ ちち ささ かんしゃ しゅくさん せいせい さ
神・父に捧げ、感謝し、祝 讃し、成 聖し、擘きて、)

司祭) そのせい もんとおよ すと あた い と くら これわ たい なんぢら ため さ
其 聖なる門徒及び使徒に 予えて曰えり、取りて食え、是我が體、爾 等の爲に擘かる

もの つみ ゆるし え いた
る者、罪の 赦 を得るを致す、



司祭) (黙誦: おなじ ぶどうじる も しゃく と みづ わ かんしゃ しゅくさん せいせい
同く葡萄酒を盛る 爵 を取りて水を和し、感謝し、祝 讃し、成 聖して、)

司祭) そのせい もんとおよ すと あた い みなこれ の これわれ しんやく ち なんぢらおよ
其 聖なる門徒及び使徒に 予えて曰えり、皆之を飲め、是 我の新約の血、爾 等及び

おお ひと ため なが もの つみ ゆるし え いた
衆くの人 の爲に流さるる者、罪の 赦 を得るを致す、



司祭) (黙誦: これ おこな われ きおく けだしなんぢらこ へい くら こ しゃく の ごと
此を行いて我を記憶せよ、蓋 爾等此の餅を食い、此の 爵 を飲む毎に、

われ し つた われ ふくかつ みと しゅさい ゆえ われら かれ すくい ほどこ
我の死を傳え、我の復活を認む、主 宰よ、故に我等も、彼が 救 を施す

くるしみ いのち ほどこ じゅうじか みつか ほうむり し ふくかつ てん のぼ こと なんぢ
苦、生命を 施す 十字架、三日の 瘡、死よりの復活、天に 升る事、爾

かみ ちち みぎ ざ こと こうえい おそ かれ さいど こうりん きおく
神・父の右に坐する事、光 榮にして畏るべき彼が再度の降 臨を記憶して、)

司祭) なんぢ たまもの なんぢ しょぼく しゅう ためいつさい ため なんぢ たてまつ
爾 の 賜 を、爾 の 諸僕より、衆 の爲 一切の爲に 爾 に 獻 りて、



や な 爾 んち を あ 崇 が め う た い な 爾 んち を ほ 讃

め あ 揚 げ な 爾 んち を ほ 讃 め あ 揚

げ な 爾 んち に かんしゃ し な 爾 んち に

か かんしゃ し わ 我 が か 神 み や な 爾 んち に い 禱

の る い 禱 の る わ 我 が か 神 み や な 爾 んち

に い 禱 の る わ 我 が か 神 み や な 爾 んち に

いの 禱 る わ が か み や

な ん ぢ に い の る な ん ぢ に い の

る

司祭) (黙誦: 至聖なる主 宰よ、是を以て我等も堪えるざる僕、我等の義に因るに非ず、(蓋
 ち あ なん ぜん な すなわちなんぢ あつ われら そそ なんぢ じれん こう
 地に在りて何の善をも爲さず) 乃 爾 が厚く我等に注ぎし 爾 の慈憐と宏
 おん よ なんぢ せい さいだん ほうじ え もの あえ なんぢ せい
 恩とに依りて、 爾 の聖なる祭壇に奉事するを獲し者は、敢て 爾 の聖なる
 さいだん ちか なんぢ せいたいせいけつ しんぞう ささ なんぢ いの
 祭壇に近づき、 爾 がハリストスの聖體聖血の眞像を獻げて 爾 に祈り、
 なんぢ よ しょせい せい もの なんぢ しぜん じんあい よ なんぢ せいしん
 爾 を籲ぶ、諸聖の聖なる者よ、 爾 が至善の仁愛に藉りて、 爾 の聖神を
 われらおよ こ そな さいひん のぞ これ しゆくふく これ せい これ
 我等及び此の奠えたる祭品に臨ましめ、之に 祝 福し、之を聖にし、之を
 あらわ
 顯 して、)

司祭) (黙誦: 第三時に 爾 の至聖神を 爾 の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取
 あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた かみ いさぎよ
 り上ぐる事勿れ、尚我等 爾 に祈る者の衷に之を新にせよ、神よ、 潔
 こころ われ つく ただ たましい われ うち あらた たま だいさんじ なんぢ し
 き心 を我に造り、正しき 靈 を我の衷に改め給え、第三時に 爾 の至
 せいしん なんぢ しと つか しぜん しゆ これ われら と あ なか
 聖神を 爾 の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取り上ぐる事勿れ、
 なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた われ なんぢ かんばせ お
 尚我等 爾 に祈る者の衷に之を新にせよ、我を 爾 の 顔 より逐うこと

なか なんぢ せいしん われ と あ なか だいさんじ なんぢ せいしん
 勿れ、爾の聖神を我より取り上ぐること勿れ、第三時に爾の至聖神を
 なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と あ なか なおわれら
 爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取り上ぐること勿れ、尚我等
 なんぢ いの もの うち これ あらた
 爾に祈る者の衷に之を新にせよ、)

司祭) こ へい もつ しゅ かみ われら きゆうせいしゅ まこと そんたい な
 此の餅を將て、主・神・我等の救世主イイススハリストスの眞の尊體と爲し、ア
 ミン。

こ しゃく もつ しゅ かみ われら きゆうせいしゅ まこと そんけつ
 此の爵を將て、主・神・我等の救世主イイススハリストスの眞の尊血、アミン、
 せかい いのち たため なが もの な
 世界の生命の爲に流されし者と爲し、アミン。

なんぢ せいしん もつ これ へんか
 爾の聖神を以て之を變化せよ、アミン。アミン。アミン。

(黙誦： われらしゅうじんいつべいいつしゃく う もの ゆいいつ せいしん たいごう もつ
 我等衆人一餅一爵を領くる者を、惟一の聖神に體合するを以て

たがい わごう わ うちひとり なんぢ せいたいせいけつ う もつ
 互に和合せしめ、我が中一人も、爾がハリストスの聖體聖血を領くるを以

しんあんあるい ていざい え いた なか すなわちわれら こせい なんぢ よるこび
 て、審案或は定罪を得るを致す勿れ、乃我等に古世より爾の喜を

な しょせいじん げんそ れつそ たいそ よげんしゃ しと でんどうしゃ ふくいんしゃ ち
 爲しし諸聖人・元祖・列祖・太祖・預言者・使徒・傳道者・福音者・致

めいしゃ ひょうしんしゃ きょうし およ およ しん もつ おわ ぎ たましい とも じ
 命者・表信者・教師、及び凡そ信を以て終りし義なる靈と偕に、慈

れん おんちよう え たま
 憐と恩寵とを獲せしめ給え、)

司祭) こと せいしんけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
 特に至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マ
 リヤと偕に、

【 常に福 に代えて 】



むれとひとのやからはみななんちを
 群一人族から皆爾ぢを

よろこぶなんぢはせいせられしでん
 喜爾は聖せられし殿

ちえなるとんどううど童うていぢよのはまれ
 智慧天堂童貞女の譽

なりよのなきさきよりわがかみ
 世無先我神

なるものなんぢよりみをうけみどりご
 者爾身受嬰り兒

となれりなんぢのふところをほうざと
 爾胎を寶座

な し なんぢの はら を てんより ひろ き も の
爾 腹 天 廣 者

と な せ り おんちよ うを み ち こうむるも の よ
恩 寵 うを 満 被 者

ば んぶ つ なんぢをよ ろ こ ぶ こ 光 うえ い
萬 物 爾 喜 光 榮

は な んぢの もの な り
爾

司祭) (黙誦：聖預言者・前驅・授洗イオアン、光榮にして讚美たる聖使徒、(某) 及

び爾が諸聖人と偕に、慈憐と恩寵とを獲せしめ給え、神よ、彼等の祈禱

よに因りて我等を顧み、並に凡そ永生の復活の望を懐きて寝りし者を記

おくたま
 憶し給え、

かみ ぼくひ きゆうしょく けんこ しょざい ゆるし ため いの
 神の僕婢(某)の救贖・眷顧・諸罪の赦の爲に禱る、

かみ ぼくひ たましい あんそく ため これ ひか ところ かなしみ なげき
 神の僕婢(某)の靈の安息の爲、之を光る處、悲と歎との

とお ところ お ため いの わ かみ かれら なんぢ かんぼせ ひかり てら
 遠ざかる所に置くが爲に禱る、我が神よ、彼等を爾が顔の光の照す

ところ あんちあんそく たま
 所に安置安息せしめ給え、

またなんぢ いの しゅ なんぢ せい こう した きょうかい せかい はて はて いた
又 爾に禱る、主よ、爾の聖・公・使徒の教會、世界の極より極に至
もの きおく なんぢ とうと ち え ところ もの へいあん およ
る者を記憶し、爾がハリストスの尊き血にて獲し所の者を平安にし、及
こ せい どう けんご よ おわり いた たま しゅ こ さいぶつ なんぢ
び此の聖なる堂を堅固にして世の終に至らしめ給え、主よ、此の祭物を爾
ささげ もの およ そのだれ ため だれ もつ だれ かわ ささげ きおく
に獻げし者、及び其誰が爲に、誰を以て、誰に代りて獻しを記憶せよ、
しゅ なんぢ しょせいどう もの たてまつ ぜんぎょう おこな およ ひんしゃ きおく
主よ、爾の諸聖堂に物を獻り、善業を行い、及び貧者を記憶す
もの きおく なんぢ ゆたか てんじょう おんし もつ かれら むく てん もの
る者を記憶して、爾が豊なる天上の恩賜を以て彼等に酬い、天の物を
もつ ち もの か ふきゅう もの もつ ふはい もの か かれら たま しゅ
以て地の物に易え、不朽の物を以て腐敗の物に易えて彼等に賜え、主よ、
こうや さんれい がんけつ ちくつ あ もの きおく しゅ どうてい けいけん きんしよく
曠野・山嶺・巖穴・地窟に在る者を記憶せよ、主よ、童貞・敬虔・禁食・
けつじょう もつ いのち わた もの きおく しゅ わくに てんのう なんぢ こ ち
潔淨を以て生を度る者を記憶せよ、主よ、我が國の天皇、爾が斯の地
おう よみ もの きおく しんじつ ぶぐじんじ ぶぐ かれ お たたかい
に王たるを嘉せし者を記憶し、眞實の武具仁慈の武具を彼に佩ばしめ、戦
ひ おい そのこうべ おお そのひぢ つよ そのみぎ て たこ そのくに けんご
の日に於て其首を蔭い、其臂を強くし、其右の手を高うし、其國を堅固
およ たたかい ほつ いほうみん かれ きふく うば ふか
にし、凡そ戦を欲する異邦民を彼に歸服せしめ、奪うべからざる深き
へいあん かれ たま かれ こころ なんぢ きょうかい ため およ なんぢ しゅうじん ため
平安を彼に賜い、彼の心に爾が教會の爲、及び爾が衆人の爲に
ぜんじ つ たま かれ へいわ われら およそ けいけん けつじょう もつ てん
善事を告げ給え、彼の平和により、我等が凡の敬虔と潔淨とを以て、恬
せいあんぜん いのち わた ため しゅ くに つかさど もの きおく ぜん
静安然として生を度らんが爲なり、主よ、國を司る者を記憶せよ、善
もの ぜん まも あく もの なんぢ じんじ もつ ぜん もの な たま しゅ
なる者を善に守り、悪なる者を爾の仁慈を以て善なる者と爲し給え、主よ、
ここ た しゅうじん およ や あた ゆえ よ きた もの きおく なんぢ じ
此に立つ衆人、及び已む能わざる故に因りて來らざる者を記憶し、爾が慈
れん おお よ かれら われら あわれ たま かれら くら もろもろ よきもの み
憐の多きに因りて、彼等と我等とを憐み給え、彼等の庫に諸の善物を盈
かれら ふうふ へいわ どうしん まも みどりご よういく しょうねん くんどう
たし、彼等の夫婦を平和と同心とに護り、嬰兒を養育し、少年を訓導
ろうしゃ ふち こころせば もの なぐさ さん もの あつ まよ
し、老者を扶持し、心狭みたる者を慰め、散じたる者を聚め、迷わされ
もの かせ なんぢ せい こう した きょうかい あ たま おき くるし
し者を歸して、爾が聖・公・使徒の教會に合わせ給え、汚鬼に苦めらる
もの と こうかい もの とも こうかい りよこう もの とも りよこう やもめ
る者を釋き、航海する者と偕に航海し、旅行する者と偕に旅行し、嫠婦を
かば みなしご まも とりこ もの すく やまい うれ もの いや たま かみ
庇い、孤子を護り、擄となりし者を救い、病を患うる者を醫し給え、神
さいばん こうさん るざい くえき およ およ うれい なやみ あやうき お もの き
よ、裁判・鑛山・流罪・苦役、及び凡そ憂愁と患難と危難とに居る者を記

おく しゅわ かみ およ なんぢ おおい あいれん もと もの またわれら あい
 憶せよ、主我が神よ、凡そ爾の大なる愛憐を求むる者、又我等を愛す
 もの われら にく もの われらあた もの かわ いの たく もの およ なんぢ
 者、我等を惡む者、我等當らざる者に代り祈るを託せし者、及び爾の
 しゅうじん きおく しゅう なんぢ ゆたか じれん そそ しゅう そのもと ところ およ
 衆人を記憶し、衆に爾の豊なる慈憐を注ぎ、衆に其求むる所、凡
 すくい ため せつよう もの あた たま かみ われらし あるい わす
 そ救の爲に切要なる者を予え給え、神よ、我等知らざるにより、或は忘
 るるにより、或は名の多きによりて記憶せざる者は、爾各人の生長と姓
 めい し おのおのひと そのかは たいない し もつ みづか これ きおく
 名とを知り、各人を其母の胎内より知るを以て、親ら之を記憶せよ、
 けだししゅ なんぢ たすけ もの たすけ のぞみ もの のぞみ たいふう あ もの きゅう
 蓋主よ、爾は助なき者の倚助、望なき者の冀望、颱風に遭う者の救
 しゃ こうかい もの みなと やまい うれ もの いし なんぢみづか しゅうじん ため
 者、航海する者の埠、病を患うる者の醫師なり、爾親ら衆人の爲
 おのおのそのもと ところ たま けだしかくじん し そのねがい そのいえ そのもとめ
 に、各其求むる所となり給え、蓋各人を知り、其願と其家と其需
 し しゅ こ まち ちほう ききん えきびょう ちしん すいなん かなん
 とを知ればなり、主よ、此の都邑と地方とを、饑饉・疫病・地震・水難・火難・
 けんなん がいこう ないらん すく たま
 劔難・外攻・内亂より救い給え、)

司祭) しゅ こと きょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう きおく
 主よ、殊に教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィムを記憶し、
 かれ へいあん ぶなん そんき そうけん ちょうじゅ もの およ なんぢ しんじつ ことば ただ つた
 彼を平安・無難・尊貴・壮健・長壽なる者、及び爾が眞實の言を正しく傳う
 もの なんぢ せい きょうかい あた たま
 る者として、爾の聖なる教會に與え給え、



司祭) (黙誦: しゅ なんぢ しんじつ ことば ただ つた せいきょうしゃ およそ しゅきょうひん きおく
 主よ、爾が眞實の言を正しく傳うる正教者の凡の主教品を記憶
 しゅ なんぢ じれん おお よ われふとう もの きおく われ およ
 せよ、主よ、爾が慈憐の多きに因りて、我不當の者をも記憶し、我に凡そ
 じゅう じゅう ざいか ゆる たま わ しょざい よ なんぢ せいしん
 自由による自由によらざる罪過を赦し給え、我が諸罪に因りて、爾が聖神
 おんちょう そな さいひん のぞ とど なか しゅ さいひん
 の恩寵の奠えたる祭品に臨むを遏むる勿れ、主よ、司祭品、ハリストスに
 よ ほさいひん およ ことごと しんびん きおく われらなんぢ せい さいだん めぐ た
 因る輔祭品、及び悉くの神品を記憶し、我等爾の聖なる祭壇に環り立

もの うち ひとり はぢ う なか しゅ なんぢ じんじ もつ われら かえり
つ者の中、一をも羞を承けしむる勿れ、主よ、爾の仁慈を以て我等を顧

なんぢ ゆたか おんけい もつ われら あらわ じゅんわ りえき な きこう
み、爾の豊なる恩恵を以て我等に現れ、順和にして利益を爲す氣候を

われら たま ち ほうさく な かんう たま なんぢ おんたく もつ とし こうむ
我等に賜い、地の豊作を爲す甘雨を賜い、爾の温澤を以て年に冠らし、

なんぢ せいしん ちから もつ しよきょうかい ぶんき おさ いほうみん きょうぼう しづ
爾が聖神の力を以て諸教會の分岐を治め、異邦民の驕暴を鎮め、

しよいたん ぶんき すみやか やぶ たま わ かみ われらしゅうじん なんぢ くに い
諸異端の紛起を速に壊り給え、我が神よ、我等衆人を爾の國に入れ

ひかり こひる こ あら なんぢ へいあん なんぢ あい われら たま けだし
て、光の子晝の子と顯わし、爾の平安と爾の愛とを我等に賜え、蓋

なんぢ ばんじ もつ われら あた
爾は萬事を以て我等に予えり、)

司祭) ならび われら くち いて ころろ いて なんぢちち こ せいしん しそんしげん な
並に我等に、口を一にし心を一にして、爾父と子と聖神の至尊至嚴の名を

さんえいさんしょう たま いま いて よよ
讃榮讃頌するを賜え、今も何時も世に、



司祭) ねがわ おおい かみ わ きゅうしゅ あわれみ なんぢしゅうじん とも あ
願くは大なる神、我が救主イイススハリストスの憐は、爾衆人と偕に在ら

んことを、



【 増聯禱 】

司祭) われらしよせいじん きおく またまたあんわ しゅ いの
我等諸聖人を記憶して、復又安和にして主に禱らん、

しゅ あわれ めよ。
主 憐

司祭) すで けん およ せい とうと さいひん ため しゅ いの
已に獻ぜられ及び聖にせられし 尊き祭品の爲に主に禱らん、

しゅ あわれ めよ。
主 憐

司祭) ひと あい わ かみ これ そのせい てんじょう むけい さいだん お ぞくしん けいこう
人を愛する我が神が、之を其聖なる天上の無形の祭壇に置き、屬神の馨香と
して享け、われら むく しんみょう おんちよう せいしん たまもの くだ ため いの
我等に報いて、神妙の恩寵と聖神の賜とを降すが爲に禱らん、

しゅ あわれ めよ。
主 憐

司祭) われら もろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの
我等 諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、

しゅ あわれ めよ。
主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

司祭) ^{こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい} 此の日の 純全・成聖・平安・無罪ならんことを ^{しゅ もと} 主に求む、

しゅ た ま え よ 。
主 賜

司祭) ^{へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま} 平安の天使、正しき 教師、吾が 靈體の守護者を ^{しゅ もと} 賜わんことを 主に求む

しゅ た ま え よ 。
主 賜

司祭) ^{われら つみ あやまち なた ゆる} 我等の 罪と 過 とを宥め赦さんことを ^{しゅ もと} 主に求む、

しゅ た ま え よ 。
主 賜

司祭) ^{われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま} 我等の 靈 に善にして益ある事、及び世界に 平安を ^{しゅ もと} 賜わんことを 主に求む、

しゅ た ま え よ 。
主 賜

司祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭) われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ
我等の生命の終がハリストニアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及び

ハリストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



司祭) しん どういつ せいしん たいごう もと われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび
信の同一と聖神の體合とを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、并

に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) (黙誦: わ かみすくい かみ なんぢ すで われら たま いま たま ところ しよん ため
我が神救の神よ、爾が已に我等に賜い、今も賜う所の諸恩の爲に、

どうぜん なんぢ かんしゃ われら おし たま わ かみ こ ささげもの う しゅ
當然に爾に感謝するを我等に訓え給え、我が神、此の獻物を享けし主よ、

なんぢわれら れいたい もろもろ けがれ きよ なんぢ おそ こころ もつ せいじ
爾我等を靈體の諸の汚より浄め、爾を畏るる心を以て聖事を

おこな おし たま ねがわ わ りょうしん きよ あかし もつ なんぢ せいひん ぶん
行うを教え給え、願くは我が良心の淨き證を以て爾が聖品の分を

う なんぢ せいいたいけつ たいごう ならび どうぜん これ う よ
領けて、爾がハリストスの聖體血に體合し、並に當然に之を領くるに藉り

て、ハリストスが我等の心に居るを得、及び爾が聖神の堂とならん、嗚呼我

かみ われら うちひとり こ なんぢ おそ てんじょう きみつ まえ つみ え
が神よ、我等の中一人をも、此の爾の畏るべき天上の機密の前に罪を獲せ

しむる^な勿^{また}く、又^{よる}宜^{かな}しきに合^{これ}わずして之^うを領^よくるに依^れりて、靈^れ體^{たい}の病^やむを致^{いた}さし
 むる^{なか}勿^{すな}れ、乃^わ我^{われ}等^らが呼^い吸^きの絶^たえんとするに至^{いた}るまで當^{とう}然^{ぜん}に爾^{なん}が聖^{せい}品^{ひん}を領^う
 くるを以^もて永^{えい}生^{せい}の引^{いん}導^{どう}となし、爾^{なん}がハリス^おトスの畏^おるべき審^{しん}判^{ばん}の時^{とき}に善^よく
 容^いれらるる對^ことなすを得^えせしめ給^{たま}え、我^{われ}等^らも古^こ世^{せい}より爾^{なん}の喜^{よろ}を爲^なしし諸^{しよ}
 聖^{せい}人^{じん}と共^{とも}に、主^{しゅ}よ、爾^{なん}を愛^{あい}する者^{もの}の爲^{ため}に備^そうる所^{ところ}の爾^{なん}が永^{えい}遠^{えん}の福^ふ樂^{らく}
 に與^あつ^つか^かもの者^{もの}とな^たるが爲^{ため}なり、)

【 天主經 】

司祭) 主^{しゅ}宰^{さい}よ、我^{われ}等^らに勇^いを以^もて、罪^{つみ}を獲^えずして、敢^あて爾^{なん}天^{てん}の神^か父^{みち}を籲^よびて言^いうを賜^{たま}え、

て天にいますわれらのちちよ、
 天に在るわれらの父よ、

ねがわくはなんちのなはせいとせられ、なんちの
 願はるはなんぢの名は聖とせられ、なんぢの

くにはきたり、なんちのむねはてんにおこな
 國はきたり、なんぢの旨は天におこな

わるるがごとくちにもおこなわれん、わ我
 如くちにもおこなわれん、われ

が に ち よ う の か て を こ ん に ち わ れ ら に あ た え た 給
日 用 の 糧 を 今日 我 等 に 與 た 給

ま え 、 わ れ ら に お い め あ る も の を わ 我
我 等 に お 債 め あ る も 者 の を 我

れ ら ゆ る す が ご と く 、 わ れ ら の お い
赦 如 く 、 我 等 の お 債

め を ゆ る し た ま え 、 わ れ ら を い ざ な い
赦 給 え 、 我 等 を 誘 ない

に み ち び か ず 、 な お わ れ ら を き よ う あ 悪
導 ず 、 猶 我 等 を 凶 悪

く よ り す く い た ま え 、
救 給 え 、

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こせいしん き いま いつ よよ
蓋 國と權能と光榮は 爾 父と子と聖 神に歸す、 今も何時も世世に、



司祭) ^{しゅうじん へいあん} 衆 人に平安、



司祭) ^{なんちら こうべ しゅ かが} 爾 等の 首 を主に屈めよ、



司祭) (黙誦：主宰・主・慈憐の父、凡の撫恤の神よ、其首を屈めし者に福を降

これ せいせい これ ほご これ けんご これ けんりつ これ およそ あくじ
し、之を成聖し、之を保護し、之を堅固にし、之を健立し、之を凡の悪事

はな およそ ぜんじ あわ ならび これ ていざい こ なんち しじょう
より離して凡の善事に合せ、並に之に定罪なく、此の爾が至淨なる

いのち ほどこ きみつ う つみ ゆるし せいしん たいごう え たま
生命を施す機密を領けしめて、罪の赦、聖神の體合を得せしめ給え、)

司祭) ^{なんち どくせいし おんちよう じれん じんあい よ なんち かれ しせいしぜん いのち} 爾が獨生子の恩寵と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命

ほどこ なんち しん とも さんよう いま いつ よよ
を施す爾の神と偕に讚揚せらる、今も何時も世に



司祭) (黙誦：主^{しゅ}イイススハリストス我等の神よ、爾^{われら}の聖^{かみ}なる住所と爾^{なんぢ}が國^{せい}の光^{すまい}榮^{なんぢ}の寶^{くに}の寶^{こうえい}の寶^{ほう}
 座^ざより眷^{かえり}み給^{たま}え、上^{うへ}には父^{ちち}と偕^{とも}に坐^ざし、此^{ここ}には見^みえずして我等^{われら}と偕^{とも}に居^おる者^{もの}よ、
 來^{きた}りて我等^{われら}を聖^{せい}にし、爾^{なんぢ}の權^{けん}能^{のう}の手^てを以^{もつ}て、爾^{なんぢ}が至^{しじょう}淨^{たい}の體^{しそん}と至^ち尊^ちの血^ちと
 を我等^{われら}に授^{さづ}け、又^{また}我等^{われら}を以^{もつ}て衆^{しゅうじん}人^{さづ}に授^{たま}け給^{たま}え、)

司祭) 謹^{つつし}みて聽^きくべし、聖^{せい}なる物^{もの}は聖^{せい}なる人^{ひと}に、

せ い なる は た だ ひ と り 、 し ゅ なる は た だ ひ 獨
 聖 なる は た だ ひ 獨

と り 、 か み ち ち の こ う え い を あ ら わ す の
 と り 、 神 父 の 光 榮 を 顯

イ イ ス ハ リ ス ト ス な り 、 ア ミ ン。
 イ イ ス ハ リ ス ト ス な り 、 ア ミ ン。

司祭) (黙誦：神^{かみ}の 羔^{こひつじ}は剖^さかれ分^{わか}たる、彼^{かれ}は剖^さかれて分^{ぶん}離^りせず、恒^{つね}に食^{くら}われて永^{なが}く盡^{つき}き
 ず、乃^{すなわち}領^{もの}くる者^{せい}を聖^{せい}にす、)

※^{レーゲント}信徒領聖まで、聖歌指揮者の指示に随って歌うこと。

(奉事規程の指定は【 主日領聖詞 】、すなわち第148聖詠の第一節を繰り返し歌い、間に2節以下をアンティフォン形式で歌う、若しくは誦經する。本来は神品領聖と信徒領聖に区別はないので、同じ領聖詞を使う。

日本正教会では神品領聖時に【 主日領聖詞 】に代えて、早課イルモス(その週の調、または生神女のカタワシヤ等)、ステヒラ等を歌うことが多いが、これに奉事規程上の根拠はない。歌えるものがない場合は、聖詠經を誦經しても良い。)

キノニク
【 主日領聖詞 第148 聖詠 】



- 句) そのことごと てんし かれ ほ あ そのことごと ぐん かれ ほ あ
其 悉 くの天使よ、彼を讃め揚げよ、其 悉 くの軍よ、彼を讃め揚げよ。
- 句) ひ つき かれ ほ あ ことごと ひか ほし かれ ほ あ
日と月よ、彼を讃め揚げよ、 悉 くの光る星よ、彼を讃め揚げよ。
- 句) しよてん てん てん うえ みづ かれ ほ あ
諸 天の天と天より上なる水よ、彼を讃め揚げよ。
- 句) しゅ な ほ あ けだしかれい すなわちな めい すなわちつく かれ
主の名を讃め揚ぐべし、 蓋 彼言いたれば、 即 成り、命じたれば、 即 造られたり、彼
これ た よよ いた のり あた これ こ
は之を立てて世世に至らしめ、 則を與えて之を躐えざらしめん。
- 句) ち しゅ ほ あ おおうお ことごと ふち ひ あられ ゆき きり しゅ ことば したが ぼうふう
地より主を讃め揚げよ、大 魚と 悉 くの淵、火と 霰、雪と霧、主の言に従う暴風、
やま ことごと おか くだもの き ことごと はくこうぼく やじゅう もろもろ かちく は もの と
山と 悉 くの陵、 果 の樹と 悉 くの栢香木、野 獣と 諸 の家畜、匍う物と飛
とり ち しよおう ばんみん ぼくはく ち しよゆうし しようねん しよぢよ おきな わらべ しゅ な
ぶ鳥、地の諸王と萬民、牧伯と地の諸有司、少 年と處女、翁と童は、主の名
ほ あ けだしただそのな たか あ そのこうえい てんち あまね
を讃め揚ぐべし、 蓋 惟 其名は高く擧げられ、其光 榮は天地に 偏 し。
- 句) かれ そのたみ つの たか そのしよせいじん しよし かれ した たみ さかえ たか
彼は其 民の角を高くし、其 諸 聖人、イズライリの諸子、彼に親しき 民の 榮 を高く
せり。

【 信徒領聖 】

司祭) ^{かみ おそ こころ しん もつ ちか きた} 神を畏るる 心と信とを以て近づき來れ、

しゅのなによりてきたるものはあがめほめら
主 名 因 來 者 崇 敬

る しゅはかみなりわれらをてらせり
主 神 我 等 照 耀

全員) ^{しゅ われしん か う みと なんぢ じつ せいかつ かみ こ ざいにん すく} 主よ我信じ、且つ承け認めて、爾を實にハリストス生活の神の子、罪人を救うが

^{ため よ きた もの しゅうざいにん うちわれだいいち またしん こ すなわちなんぢ し}
爲に世に來りし者となす、衆罪人の中我第一なり、又信ず、此れは乃爾が至

^{じゅう たい こ すなわちなんぢ しそん ち ゆえ なんぢ いの われ あわれ わ じゆう}
淨の體、此れは乃爾が至尊の血なりと、故に爾に祈る、我を憐み、我が自由

^{じゆう ことば おこない し し おか しょざい ゆる たま ならび}
と自由ならずして、言と行にて、知ると知らずして、犯しし諸罪を赦し給え、並

^{われ ていざい なんぢ しじょう きみつ う つみ ゆるし えいせい え いた たま}
に我に定罪なく、爾が至淨なる機密を領けて、罪の赦と永生とを得るを致させ給

え、アミン。

^{かみ こ いまわれ なんぢ きみつ えん あづか もの い たま けだしわれなんぢ あだ き}
神の子よ、今我を爾が機密の筵に與る者として容れ給え、蓋我爾の仇に機

^{みつ つ なんぢ ごと せつばん な すなわちうとう ごと なんぢ う}
密を告げざらん、また爾にイウダの如き接吻を爲さざらん、乃右盜の如く爾を承

^{みと い しゅ なんぢ くに おい われ きおく しゅ いの なんぢ せい きみつ}
け認めて曰う、主よ、爾の國に於て我を記憶せよと。主よ、祈る爾の聖なる機密を

^{う わ ため しんあんあるい ていざい れいたい いやし}
領くるは、我が爲に審案或は定罪とならず、すなわち靈體の醫とならんことを、ア

ミン。

【 (大パスハ) ^{キノニク} 領聖詞 】

※ 全員が領聖し畢り、元の位置に戻るまで繰り返す。

ハリス トス の せ い た い を う け 、 ふ し 死 の い づ み
 聖 體 領 不 死 泉 み

を の め よ 。
 飲

※ 全員が元の位置に戻って歌う準備ができてから「アリルイヤ」を歌う。

ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ

司祭) (黙誦：ハリストスの復活を見て、聖なる主イイスス・獨罪なき者を拝むべし、ハ
 リストスよ、我等爾の十字架を拝み、爾の聖なる復活を歌い讃む、爾
 われらなんぢ じゅうじか おが なんぢ せい ふくかつ うた ほ なんぢ
 は我等の神なればなり、爾の外他の神を知らず、唯爾の名を稱う、信者よ、
 われら かみ なんぢ ほかた かみ し ただなんぢ な と な しんじや
 皆來りてハリストスの聖なる復活を拝むべし、十字架にて喜は全世界に
 みなきた せい ふくかつ おが じゅうじか よろこび ぜんせかい
 のぞ われらつね しゅ ほ あ そのふくかつ あが うた しゅ じゅうじか
 臨めばなり、我等恒に主を讃め揚げて、其復活を崇め歌わん、主は十字架
 に釘うたるるを忍びて、死を以て死を亡ししによる、
 くぎ しの し もつ し ほろぼ
 あらた ひか ひか しゅ こうえいなんぢ かがや
 新なるイエルサリムよ、光り光れよ、主の光榮爾に輝けばなり、シオン
 いまいわ たのし なんぢ いさぎよ しょうしんぢよ なんぢ う しゅ ふくかつ
 よ、今祝いて樂めよ、爾も潔き生神女よ、爾が生みし主の復活を
 よろこ たま
 歡び給え、

嗚呼大にして至聖なるパスハ・ハリストスよ、嗚呼智慧と神の言と能力よ、爾

くに く り へ おい われら なおしたし なんぢ う たま
が國の暮れざる日に於て、我等に猶 親 く 爾 を領けさせ給え

しゅ なんぢ しそん ち もつ なんぢ しよせいじん きとう よ ここ きおく
主よ、 爾 が至尊の血を以て、 爾 が諸 聖 人の祈禱に因りて、此に記憶せら

もの しょざい あら たま しゅわ かみ われらなんぢ しじょう ふし てん
れし者の諸 罪を滌い給え、主我が神よ、我等 爾 が至 淨 にして不死なる天

じょう せいきみつ なんぢ われら れいたい しおん せいせい いりょう たま ところ もの
上 の聖機密、 爾 が我等の靈 體の施恩・成 聖 ・醫 療 として賜いし 所 の者

う よ なんぢ かんしゃ ばんゆう しゅさい なんぢみづか われら なんぢ
を領くるに因りて 爾 に感謝す、萬有の主 宰よ、 爾 親 ら我等が 爾 のハリ

せいたいけつ う もつ そのはぢ え しん いつわり あい えいち ぞうえき
ストスの聖 體 血を領くるを以て、其 耻を得ざる信、 偽 なき愛、睿智の増 益、

れいたい いりょう しよてき くちく なんぢ いましめ じゅんしゅ ならび なんぢ
靈 體の醫 療、諸 敵の驅 逐、 爾 が誠 の順 守、並 に 爾 がハリストスの

おそ しんぱん おい よ い こたえ いた たま
畏るべき審 判に於て善く容れらるる 對 となるを致させ給え、)

司祭) かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ
神よ、 爾 の民を救い、及び 爾 の嗣 業 に福を降せ、

われらすでにまことのひかりをみ観てんの天

せいしんをうけただしきしんをえて

わかれざるせいさんしゃをおがむかれわれ

らをすくいたまえばなり

司祭) (黙誦: 神よ、願 くは 爾 は 諸 天 の 上 に 擧 げ ら れ、 爾 の 光 榮 は 全 地 を 蔽 わ ん、 我
 等 の 神 は 恒 に 崇 め 讃 め ら る、)

司祭) 今 も 何 時 も 世 世 に、

うくるをゆるせばなり、いのるわれらを
領許 祈 我 等

なんぢのせいせいにまもり、しゅうじつなんぢ
爾 成 聖 護 終 日 爾

のぎをならわしめたまえ、
義 習 給 え

ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ

司祭) ^{つつし た しんせい しじょう ふし いのち ほどこ てんじょう おそ せい}
謹みて立て、神聖・至淨・不死にして生命を施す天上の畏るべきハリストスの聖

^{きみつ う よろ しゅう かんしゃ}
機密を領けて、宜しく主に感謝すべし、

しゅう あわれ めよ、しゅう あわれ めよ。
主 憐 主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも}
神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救い憐み護れよ、

司祭) ^{こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい もと われらおのれ みおよ たがい}
此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを求めて、我等己の身及び互に

^{おのおの み もつ ならび ことごと われら いのち もつ かみ いたく}
各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ な んぢ に。

司祭) ^{けだしなんぢ われら せいせい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ}
蓋 爾 は我等の成聖なり、我等光榮を 爾 父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世

に、

ア ミ ン、ア ミ ン。

司祭) ^{へいあん い}
平 安にして出づべし、

しゅ の な に よ り て

司祭) ^{しゅ いの}
主 に 禱 らん、

しゅ あ わ れ め よ

司祭) ^{なんぢ さんよう もの ふく くだ およ なんぢ たの もの せい しゅ なんぢ たみ すく}
爾 を 讚 揚 する 者 に 福 を 降 し、 及 び 爾 を 恃 む 者 を 聖 に する 主 よ、 爾 の 民 を 救

^{い およ なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ きょうかい じゅうまん まも なんぢ どう び}
い、 及 び 爾 の 嗣 業 に 福 を 降 し、 爾 が 教 會 の 充 満 を 守 り、 爾 が 堂 の 美 なる を

^{あい もの せい なんぢ しんせい ちから もつ かれら こうえい およ われらなんぢ たの}
愛 する 者 を 聖 に せよ、 爾 が 神 聖 の 力 を 以 て 彼 等 を 光 榮 し、 及 び 我 等 爾 を 恃 む

^{もの のこ なか なんぢ せかい なんぢ しょきょうかい しょしさい わ く に てんのうおよ く に}
者 を 遺 す 勿 れ、 爾 の 世 界 と 爾 の 諸 教 會 と 諸 司 祭 と、 我 が 國 の 天 皇 及 び 國 を

つかさど ものおよ なんぢ しゅうじん へいあん たま けだしおよそ ぜん ほどこし およそ ぜんび
司 する者及び爾の衆人に平安を賜え、蓋凡の善なる施、凡の全備なる

たまもの うえ なんぢこうめい ちち くだ われらこうえい かんしゃ ふくはい なんぢちち
賜は、上より、爾光明の父より降るなり、我等光榮・感謝・伏拝を爾父と

こ せいしん けん いま いつ よよ
子と聖神に獻ず、今も何時も世に、





誦經) われいつ とき しゅ ほ あ かれ ほ つね わ くち あ わ たましい しゅ もつ
 我 何れの時にも主を讃め揚げん、彼を讃むるは恒に我が口に在り、我が 靈 は主を以
 ほこ おんじゅう もの き たの われ とも しゅ とうと とも かれ な あが ほて
 て誇らん、温 柔 なる者は聞きて樂しまん。我と偕に主を 尊 め、偕に彼の名を崇め讃
 めん。我 嘗て主を尋ねしに、かれ われ き い わ すべ あやう われ まぬか
 め給えり。目を擧げて彼を仰ぐ者は照されたり、彼等の 面 は愧を受けざらん。此の貧し
 たま め あ かれ あお もの てら かれら おもて はぢ う こ まづ
 き者呼びしに、主は聆き納れて、之を其 悉 くの艱難より救えり。主の 使 は主を畏
 るる者を環り衛りて、かれら たす あぢわ しゅ いか じんじ み かれ たの ひと
 は 福 なり。凡そ主の聖人よ、主を畏れよ、蓋 彼を畏るる者は乏しきことなし。少
 しし とぼ う ただしゅ たづ もの なん こうふく か
 き獅子は乏しくして餓え、唯 主を尋ぬる者は何の幸福にも缺くるなし。

司祭) (黙誦: みづか ほうりつ しょよげんしゃ じょうまん ちち ていせい ことごと じょうまん
 しハリストス我が神よ、常に我等の心を喜 と 樂 とに成満せしめ給え、
 いま いつ よよ
 今も何時も世世に、)

司祭) ねがわ しゅ こうふく そのおんちよう じんあい よ つね なんぢら あ いま いつ
 願くは主の降福は、其恩寵と仁愛とに因りて常に爾等に在らん、今も何時も
 よよ
 世世に、



※ もし永眠者記憶を続けて行う場合はP52【 ^{リテイヤ}永眠者の爲の熱衷祈祷】に飛ぶ。

【 通常の終結 】

司祭) かみわれら たのみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き
 ハリストス神我等の侍よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、



こ 光 う え 榮 い は ち 父 ち と こ 子 と せ 聖 い し 神 ん に き 歸 す 、 い ま も



い 何 つ 時 も よ 世 よ 世 に ア ミ ン し ゅ あ わ れ め し ゅ あ わ れ 主 憐 主 憐



め し ゅ あ わ れ め よ 、 ふ 福 く を く だ せ 主 憐 降

司祭) ^{し ふくかつ}死より復活せし^{われら まこと かみ}ハリストス我等の眞の神は、^{そのしじょう はは こうえい}其至淨なる母、^{さんび}光榮にして讚美たる

^{せいしと われら せいしんぶ}聖使徒、我等の聖神父^{だいしゅきょうせいだい}カツパドキヤのケサリヤの大主教^{こくしょうほう}聖大ヴァシリイ、克肖捧

^{しん わがしよしんぶ}神なる我諸神父、^{およ しよせいじん きとう より われら あわれ すく ぜん}(某) 及び諸聖人の祈禱に因て我等を憐み救わん。善にし

^{ひと あい しゅ}て人を愛する主なればなり、



ア ミ ン。



か 神 み よ わ が く に の てん の 皇 う お よ び

くにをつかさどるもの
國

われらのふしゅきょうセラフィム、およびこごと
我 等 府 主 教

くのせいきょうのハリストイアニンを
正 教 を いくとせ
幾 と 歳

にもまもりたまえ
護 給

〈 聖体礼儀終了 十字架接吻 〉

【 幾歳も 】

The image displays a musical score for the hymn 'Ikusai mo' (幾歳も). It is arranged in three systems, each with a vocal line (treble clef) and a piano accompaniment (bass clef). The lyrics are written in Japanese characters below the notes. The first system contains the first two lines of the hymn. The second system contains the next two lines. The third system contains the final line and ends with a double bar line. The piano accompaniment consists of chords and simple melodic lines in the bass register.

い 幾 く と 歳 せ も い 幾 く と 歳 せ も い 幾 く
と 歳 せ も い 幾 く と 歳 せ も い 幾 く と 歳 せ も
い 幾 く と 歳 せ も

【 永眠者の爲の熱衷祈禱 ^{リテイヤ} 】

ひとをあいするきゆうせいしゅよしせしぎじん
人 愛 救 世 主 死 義 人

のたましいとともになんぢがぼくひのたま
霊 借 爾 僕 婢 霊

しいをやすんぜしめてかれらをなんぢにあ在
安 彼 等 爾 在

るふくらくのいのちにまもりたま
福 楽 の 生 命 に 護 り 給

え

しゅよなんぢがしよせいじんのあんそくするところ
主 爾 諸 聖 人 安 息 處

に なんぢが ぼくひの たましいを やすんぜ しめ た給
 爾 僕 婢 靈 安 給

ま え なんぢ ひと りひとを あいする しゆなれば
 爾 獨 人 愛 主 成れば

な り

こ う え い は ち ち と こ と せ い しん に き 歸 す
 光 榮 い は ち ち と こ と 聖 い しん に き 歸 す

なんぢ は ぢご く に くだりて つながれし もの の く鎖
 爾 地 獄 に 降 繋 がれし もの の く鎖

さり を と き た る か み な り み づ か ら なんぢ
 釋 き た る か み な り み づ か ら 爾

が ぼ く ひ の た ま し い を や す ン ぜ し め た ま
 僕 く 婢 の た ま し い を や す ン ぜ し め た 給

え

い ま も い つ も よ よ に ア ミ ン
 今 も 何 時 も 世 世 に ア ミ ン

ひ と り い さ ぎ よ く き ず な き ど う て い ぢ ゃ た ね な
 獨 り い 潔 さ ぎ よ く き ず な き ど う て い ぢ ゃ た ね な

く し て か み を う み し も の よ か れ ら の た ま
 神 様 を 生 む 者 の よ か れ ら の た ま

し の す く わ れ ン こ と を い の り た ま え
 救 済 の 祈 り 給 いた ま え

【 重聯祈禱 】

司祭) ^{かみ なんぢ おおい あわれみ より われら あわれ なんぢ いの き い あわれ}
 神よ、爾の大なる憐に因て我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

しゅ あ わ れ め しゅ あ わ れ め しゅ あ わ れ め よ 。
 主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またねむ かみ ぼくひ たましい あんそく ため およ かれら およ じゆう じゆう}
 又寝りし神の奴婢(某)の靈の安息の爲、及び彼等に凡そ自由と自由ならざ

^{つみ ゆる ため いの}
 る罪の赦されんが爲に禱る、

しゅ あ わ れ め しゅ あ わ れ め しゅ あ わ れ め よ 。
 主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{しゅかみ かれら たましい しょぎじん あんそく ところ い たま いの}
 主神が彼等の靈を諸義人の安息する處に入れ給わんことを禱る、

しゅ あ わ れ め しゅ あ わ れ め しゅ あ わ れ め よ 。
 主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{かれら かみ あわれみ てんこく しょざい ゆるし たま わがし おうおよ}
 彼等に神の憐と天國と諸罪の赦とを賜わんことを、ハリストス我死せざる王及

^{かみ ねが}
 び神に願う、

しゅ た ま え よ 。
 主 賜

司祭) ^{しゅ いの}
 主に禱らん、



司祭) もろもろ れいしん もろもろ にくたい かみ し ほろ あくま むなし なんぢ せかい いのち
 諸の靈神と諸の肉體との神、死を亡ぼし悪魔を虚くし、爾の世界に生命

たま しゅ なんぢみづか ねむ なんぢ ぼくひ たましい ひか ところ しげ くさば
 を賜いし主よ、爾親ら寝りし爾の僕婢(某)の靈を光る處、茂き草場、

へいあん ところ やまい かなしみ なげき とお ところ あんそく ぜん ひと あい
 平安の處、病と悲と歎との遠ざかる處に安息せしめ、善にして人を愛する

かみ より かれら あるい ことば あるい おこない あるい おもい おか ことごと つみ ゆる
 神なるに因て彼等が或は言、或は行、或は思にて犯しし悉くの罪を赦

たま けだしひとひとり い つみ おこな もの ただなんぢ つみ なんぢ ぎ えいえん
 し給え。蓋人一も生きて罪を行わざる者なし、唯爾は罪なし、爾の義は永遠

ぎ なんぢ ことば しんじつ けだし われら かみ なんぢ ねむ なんぢ ぼくひ
 の義、爾の言は眞實なり。蓋ハリストス我等の神よ、爾は寝りし爾の僕婢

(某)の復活と生命と安息なり。我等光榮を爾と爾の無原の父と至聖至善に

して生命を施す爾の神とに獻ず、今も何時も世々に、



【 永眠者の爲のコンダク 】



を しよ せ い じ ん と と も に や ま い
諸 聖 い 人 と 借 も に や 疾 ま い

も か な し み も な げ き も な く た だ お 終
悲 な し み も な げ き も な く た だ お 終

わ り な き い の ち の あ る と こ ろ に や す ん
り な き い の ち の あ る と こ ろ に や す ん

ぜ し め た ま え
給 た ま え

【 終 結 】

司祭) ^{かみわれら たのみ} ハリストス神我等の 侍よ、^{こうえい なんぢ き} 光榮は爾に歸す、^{こうえい なんぢ き} 光榮は爾に歸す、

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
光 榮 い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も

い つ も よ よ に ア ミ ン しゅ あ わ れ め しゅ あ わ れ
 何 時 も 世 世 に ア ミ ン 主 憐 れ 主 憐

め しゅ あ わ れ め よ 、 ふ く を く だ せ
 主 憐 れ め よ 、 福 を 降

司祭) ^{し ふくかつ い もの し もの そのぜんのう て たも たま われら まこと}
 死より復活し、生ける者と死せし者を其全能の手に保ち給うハリストス我等の眞の

^{かみ そのしじょう はは こうえい さんび せいしと こくしょうほうしん わがしよしんぶ}
 神は、其至浄なる母、光栄にして讚美たる聖使徒、克肖捧神なる我諸神父、

(某) ^{およ しょせいじん きとう より ねむ ぼくひ たましい しょぎじん すまい い}
 及び諸聖人の祈禱に因て、寝りし僕婢(某)の靈を諸義人の住所に入

^{ふところ やす しょぎじん れつ くわ およ われら あわれ すく ぜん}
 れ、アブラアムの懐に安んぜしめ、諸義人の列に加え、及び我等を憐み救わん。善

^{ひと あい しゅ}
 にして人を愛する主なればなり、

ア ミ ン。

司祭) ^{しゅ なんぢ ぼくひ さいわい ねむり えいえん あんそく あた かれら えいえん きおく}
 主よ、爾の僕婢(某)の福なる寝に永遠の安息を與え、彼等に永遠の記憶

^{な たま}
 を爲し給え、

え い え ん の き お 憶 く 、 え い え ん の き 憶
 永 遠 ん の き お 憶 遠 遠 ん の き 憶

お憶 ぐ、えい えん の き記 お憶 ぐ。

【 萬壽詞 】

か 神 み よ わ 我 が 國 に の てん の 皇 う お 及 よ び

く に を つ か さ ど る も の
國

わ れ ら の ふ し ゆ き よ う セ ラ フィ ム、 お よ び こ と ご と
我 等 府 主 教 及 悉

く の せ い き よ う の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を い く と せ
正 教 幾 と 歳

A musical score for the phrase "にもまもりたまえ" (Nimo mamori tamae). The score is written on two staves, a treble clef on top and a bass clef on the bottom. The key signature has one flat (B-flat). The melody is on the treble staff, and the accompaniment is on the bass staff. The lyrics are written below the treble staff: "に も ま も り た ま え". The word "ま" is written as "ま護" and "り" is written as "り給". The music consists of a series of chords and single notes, with a steady rhythm.

(祈祷終了、十字架接吻)

りょうせいかんしゃしゆくぶん
【 領 聖 感 謝 祝 文 】

かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き
神や光榮は爾に歸す、神や光榮は爾に歸す、神や光榮は爾に歸す。

【 第一祝文 】 しゆわ かみ なんぢわれざいにん す なおなんぢ せい きみつ あづか もの
主我が神や、爾我罪人を棄てずして、尚爾の聖なる機密に與る者

いた たま なんぢ かんしゃ われた もの なんぢ しじょう てん たまもの う
と致させ給うを爾に感謝す、我堪えざる者に爾が至淨なる天の賜を受くるを

ゆる たま なんぢ かんしゃ しゆさい ひと あい しゆ われら たため し ふくかつ われ
容し給うを爾に感謝す、主宰・人を愛する主、我等の爲に死して復活し、我が

たましい からだ おん あた これ せい たため われら こ おそ べ いのち ほどこ
靈と體とに恩を與え、之を聖にするが爲に、我等に此の恐る可くして生命を施す

きみつ たま もの もと こ きみつ われ たましい からだ いや およそ てき がい か
機密を賜いし者や、求む此の機密は、我にも靈と體とを癒し、凡の敵の害を驅

われ こころ め あきら われ たましい ちから へいあん しはだ え しん いつわり
り、我が心の目を明かにし、我が靈の力を平安にし、耻を得ざる信とし、偽

なき愛とし、睿智を充たし、爾の誠を守らしめ、爾が神聖の恩寵を益し、爾

くに つ もの え たま われ か ごと こ きみつ なんぢ せいせい
の國を嗣がしむる者となるを得せしめ給え、我は此くの如く、是の機密にて爾の成聖

まも つね なんぢ おんちよう おも またおの たため せいかつ すなわちなんぢわ しゆさいおよ
に護られ、常に爾の恩寵を思い、復己が爲に生活せず、乃爾我が主宰及

おんしゆ たため せいかつ もつ えいせい のぞみ いた こ よ はな えいえん いこい か
び恩主の爲に生活し、以て永生の望を懷き、此の世を離れて、永遠の息、彼の

しゆく もの た こえ およ なんぢ かんばせ い つく びぜん み もの かぎ
祝する者の絶えざる聲、及び爾が顔の言い盡されぬ美善を見る者の限りなき

たのしみ ところ いた けだし わ かみ なんぢ なんぢ あい もの まこと のぞみ
樂の處に至らん、蓋ハリストス我が神や、爾は爾を愛する者の眞の望と

い つく たのしみ およ ぞう う もの なんぢ よよ ほ うた
言い盡されぬ樂なり、凡そ造を受けし者は爾を世々に讃め歌う、「アミン」。

【第二祝文 聖大ワシリイの原文】 しゆさい かみ ばんせい おう ばんぶつ ぞうせいしゃ およ
主宰ハリストス神、萬世の王、萬物の造成者や、凡

われ たま ところ しょぜん かついのち ほどこ しじょう なんぢ きみつ う たま
そ我に賜いし所の諸善、且生命を施す至淨なる爾の機密を領けさせ給いしを

なんぢ かんしゃ またなんぢ いの ぜん ひと あい しゆ われ なんぢ おおい した なんぢ
爾に感謝す、又爾に祈る、善にして人を愛する主や、我を爾が庇の下に、爾

つばさ かげ まも われ いき た いた まで いさぎよ りょうしん もつ とうぜん
が翼の蔭に護り、我に呼吸の絶えんとするに至る迄、潔き良心を以て、當然に

なんぢ せいたいせいけつ う もつ つみ ゆるし えいせい う いた たま けだしなんぢ いのち
爾の聖體聖血を領け、以て罪の赦と永生とを得るを致させ給え、蓋爾は生命

かて せいせい いづみ しょぜん たま しゆ われらなんぢ ちち せいしん こうえい けん いま
の糧、成聖の泉、諸善を賜う主なり、我等爾と父と聖神とに光榮を獻ず、今

いつ よよ
も何時も世々に、「アミン」。

【 第三祝文 聖シメヲン「メタフラスト」の原詩 】 わ ぞうせいしゆ あまん おのれ み かに
我が造成主、甘じて己の身を糧と

われ あた ひ ふとうしゃ や もの もと われ や なか すなわちわ ひやくたいしよ
して我に與え、火にして不當者を焚く者や、求む我を焚く母れ、乃吾が百體諸

せつしんぶく い わ しょざい とげ や たましい きよ おもい せい すじ ほね かつ
節 心腹に入り、吾が諸罪の棘を焚き、靈を淨め、思を聖にし、筋と骨とを固め、
ごかん あきら わ ぜんしん なんぢ おそ おそれ くぎ つね われ おお われ たも
五官を明かにし、吾が全身を、爾を畏るる畏に釘うち、常に我を庇い、我を保
ち、我を靈を害する諸の行と言とより護り、我を淨め、我を滌い、我を
かざ われ おさ われ ひら われ てら わ またつみ すまい てひとりなんぢ せいしん
飾り、我を治め、我を啓き、我を照し、我が復罪の住所たらずして、獨爾が聖神
すまい るあらわ およそ あくしゃおよそ よく われせいたい い よ なんぢ いえ
の住所たるを顯し、凡の悪者凡の慾は、我聖體の入るに依りて爾の家となり
もの に ひ に ごと たま われそのてんたつしゃ もろもろ
し者より逃ぐるごと、火より逃ぐるが如くならしめ給え、我其轉達者として、諸の
せいじゃ しょひん てんし なんぢ ぜんく ちえ しと およ なんぢ むてんしじょう はは なんぢ
聖者、諸品の天使、爾の前驅、智慧なる使徒、及び爾が無玷至淨の母を爾に
すす じれん しゅわ かれら きとう い なんぢ えきしゃ ひかり こ
進む、慈憐の主我がハリストスや、彼等の祈禱を容れて、爾の役者を光の子となし
たま けだしひとりしぜん しゅ なんぢ われら たましい せいせい こうめい われらみなかみ
給え、蓋獨至善の主や、爾は我等の靈の成聖と光明なり、我等皆神と
しゅさい よろ ところ ごと ひび こうえい なんぢ けん
主宰に宜しき所の如く、日に光榮を爾に獻ず。

【 第四祝文 】 しゅ われら かみ ねがわ なんぢ せいたい わ ため
主 イススハリストス我等の神や、願くは爾の聖體は、我が爲に

えいせい なんぢ せんけつ つみ ゆるし ねがわ こ かんしゃ まつり わ ため
永生となり、爾の尊血は、罪の赦とならん、願くは此の感謝の祭は、我が爲に
きえつ そうけん あんらく またおそ べ なんぢ さいど こうりん とき われざいにん なんぢ
喜悅と壯健と安樂とならん、又畏る可き爾が再度の降臨の時、我罪人に、爾
こうえい みぎ た え たま なんぢ しじょう はは しょせいじん きとう よ
が光榮の右に立つを得せしめ給え、爾が至淨の母と諸聖人との祈禱に依りてなり。

【 第五祝文 至聖生神女に捧ぐ 】 しせい ぢよさい しょうしんぢよ わ くら たましい ひかり
至聖なる女宰・生神女、我が味みたる靈の光、

わ たのみ おおい かくれが なぐさめ よろこび なんぢ われた もの なんぢ こ しじょう
吾が憑恃と幘幘と避所と慰藉と歡喜や、爾が我堪えざる者に、爾の子の至淨の
たいしそん ちう もの え たま なんぢ かんしゃ なおいの まこと ひかり
體至尊の血を領くる者となるを得せしめ給いしを爾に感謝す、猶祈る、眞の光を
う もの わ ころ れいもく あきらか ふし いづみ う もの われつみ ころ
生みし者や、吾が心の靈目を明にせよ、不死の泉を生みし者や、我罪に殺され
もの い たま じれん かみ じあい はは われ あわれ わ ころ しょうかん ひつう
たる者を生かし給え、慈憐なる神の慈愛の母や、我を憐み、吾が心に傷感と悲痛、
わ おもい けんそん わ とりこ いねん よびかえし たま われ いき た いた
吾が思に謙遜、吾が虜となりし意念に呼還を賜い、我に呼吸の絶えんとするに至
るまで、罪を獲ずして、至淨なる機密の成聖を受けて、靈と體との醫を得るを致
ならび われ つうかい うけとめ なみだ あた しょうがいなんぢ かしょうさんえい たま
し、並に我に痛悔と承認との涙を與えて、生涯爾を歌頌讚榮せしめ給え、
けだしなんぢ よよ さんび こうえい み こうむ
蓋爾は世々に讚美と光榮とを満ち被る、「アミン」。